

フタオビコヤガ

チョウ目ヤガ科に属し、幼虫は別名「イネアオムシ」、英名でも Rice green caterpillar と呼ばれる稲の食葉性害虫です。日本、台湾、東南アジア、南アジアにかけて稲作地帯に広く分布しています。従来は発生が少ない害虫でしたが、近年は全国的に発生が増加し被害が散発しています。本虫の発育は早く、夏季では卵期間5日、幼虫期間15日、蛹期間12日程です。被害が大きい加害時期は出穂5～10日前頃で、食害されたイネは出穂が遅れ、収量は低下します。

1. 生態

(1) 成虫

「フタオビコヤガ」という和名のとおり、前翅は明るい黄色で暗褐色の斜めの帯が2本あります。体長6～10mm、開帳16～24mm、雌はやや大きく、帯模様は途切れ不明瞭です。4月下旬～5月上旬に羽化する越冬世代成虫は、他の世代より体が小さく全体的に黒っぽく帯模様は不明瞭です。

北陸では年に3～4回発生し、成虫の寿命は10日程です。雌はイネや雑草の葉や葉鞘表面に7、8粒ずつ2、3列に300～400粒、多いもので700粒程度産卵します。

(2) 幼虫～蛹

緑色をしたやや細長い体でシャクトリ状に歩行し、体長20～25mm程度まで成長します。発生しやすい箇所は、山間部、堤防沿い、集落の周辺等、風通しが悪く湿度が高い水田です。また、前年の多発田や窒素過多、過繁茂、生育遅れ及び遅植えの水田でも発生しやすい傾向です。

1～2齢期は葉の表皮を残して点々と葉肉を食害するので、食痕はカスリ状の白斑となります。3齢以降は摂食量が急激に増え、葉縁から四角に切り取った状態や葉の中央の筋のみ残して激しく食害するようになります。多湿を好むため、晴天時にはイネの下部に、曇雨天時や夜間は上部に上って摂食活動をする習性があります。終齢幼虫はイネの葉先を2、3重に折り曲げ糸で綴って三角柱状のツトを作り、葉から切り離して水面上に落下し内部で蛹になります。水面上に落下したツトは笹舟のように浮かび、水尻に集まったり、風により畦に漂着したりします。



幼虫



被害

2. 発生予察

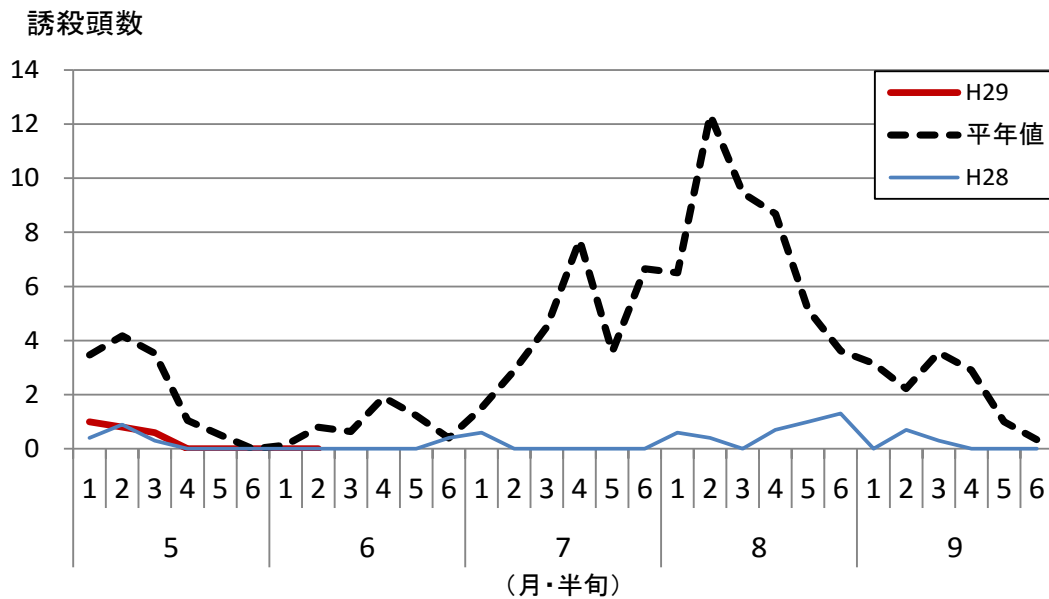


図 フェロモントラップにおける誘殺消長（金沢市才田町）

病害虫防除室では、金沢市と加賀市にフェロモントラップを設置し、雄成虫の発生消長を調査しています。平年では7～8月に第2世代と第3世代成虫が多く誘殺され、出穂前後の稲の葉を加害し、収量に影響を与えるのはこの時期の幼虫です。今年の金沢における幼虫の発生時期は第2世代が7月2日頃から、第3世代幼虫は7月26日頃からと予測されます。（6月16日現在、有効積算温度から推測）

3. 防除対策

幼虫は緑色で小さく、静止している事が多いので発見が遅れる場合があります。

また、幼虫の発育には高い湿度を要するため、多雨の年は発生が多くなる傾向があるので注意が必要です。

基本防除は粒剤の苗箱処理による予防防除と穂ばらみ期の粒剤や水和剤散布の本田防除です。

粒剤の苗箱処理では Dr. オリゼフェルテラ粒剤、ファーストオリゼフェルテラ粒剤、ルーチンアドスピノ箱粒剤の防除効果が確認されています。（宮城県）

穂ばらみ期以前であっても、幼虫の発生が多い場合は防除が必要となります。

防除の目安は、鳥取県では発生している幼虫の7割以上が約12mm以上かつ食害株率が90%以上かつ食害株の食害面積率が10～20%以上、大阪府では株当たり1頭以上となっています。

なお、育苗箱施用剤を使用したほ場においても、本虫の発生が非常に多い場合は追加防除が必要になるので、発生状況には注意が必要です。